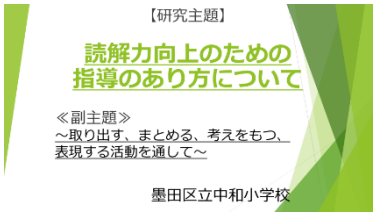
Ⅲ　研究のまとめ

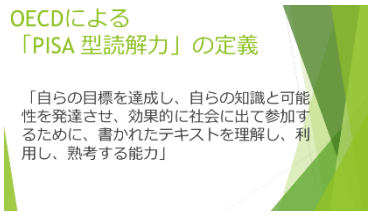
1　令和２年度「特色ある学校づくり推進校」研究内容発表原稿

・ただいまより、読解力向上の為の指導の在り方について
「取り出す」「まとめる」「考えをもつ」「表現する」活動を通して令和２年度、特色ある学校作り推進校の発表を行います。



・今年度は、児童の読解力、中でも「PISA 型読解力」を向上させる取り組みについて、研究していくことを決めました。

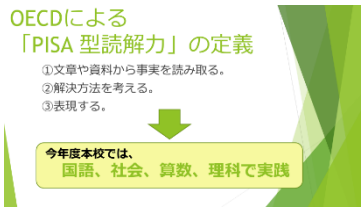
・「PISA 型読解力」とは、OECD では
「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に出て参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義しています。



・つまり、課題を解決するために、様々な文章や資料から事実を読み取り、それらをもとに解決方法を考え、
さらに、それを「表現する力」が、「PISA 型」読解力と言えます。

・これは、本校児童にとって必要な力であると考えました。

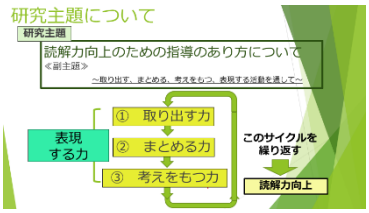
・初年度となる本年度は、「国語科」「社会科」「算数科」「理科」の４教科で研究を進めることとしました。



・主要４教科からアプローチすることで、より多くの日々の実践が可能となり、総合的に「PISA 型読解力」を育成することが可能になると考えました。

・今年度の研究主題についてお話します。

・本校では、読解力を
　1　情報をよく読み、その概略を「取り出す力」
　2　取り出した情報の中から大切な部分だけを「まとめる力」
　3　その情報に対して、「自分の考えをもつ力」



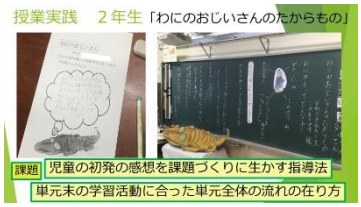
・そして、１から３までのそれぞれの段階に適した「表現する力」を育成するというサイクルを繰り返すことで「読解力」が向上するものと考えました。

・それでは、授業実践について報告します。

・これは２年生の「国語科」
「わにのおじいさんのたからもの」の授業実践です。

・この授業では、教室全体を物語の場面と見立て、わにが旅する様子を再現しました。
・それによって、児童が物語の世界を想像しやすくなりました。
・また、本時の導入と終末に音読を入れることで、読み取ったことが音読に表れ、深い読み取りにつながりました。

・課題として
・児童の初発の感想を学習課題づくりに生かす指導の重要性が分かりました。
・また、単元末の学習活動に合った単元の流れを計画することの重要性も分かりました。



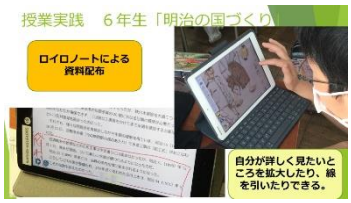
・６年生の「社会科」
「明治の国づくり」の授業実践です。

・この授業実践では、長文の文章資料を読み取りやすくするための効果的な手だてが４点ありました。

・１つめは、学習マンガ風のワークシートの活用です。

・ここではマンガ絵の吹き出しの中に、読み取ったことを書き入れる活動を行いました。
・それにより、児童は読み手を自然に意識して情報をわかりやすくまとめようとする姿が見られました。

・２つめは、ロイロノートというアプリを使ったことです。
資料の読み取りの際に、自分が詳しく見たいところに線を引いたり、拡大したりすることができ、効果的な読み取りを行う姿が見られました。

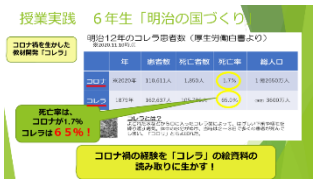


・３つめは、コロナ禍を生かした教材開発です、
教科書には載っていない「コレラの伝染と水道の近代化」の学習を単元末に取り入れました。

・コロナ禍で体験してきたことを既有知識として、共通点や相違点に着目しながら明治時代の「コレラ対策」としての上下水道の敷設について学ぶことは、児童にとって非常に興味深い教材となりました。

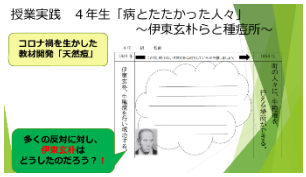
・明治時代のコレラ患者の搬送の様子から、旗を立てて注意喚起しているなど、当時の感染症との闘いの様子について、詳しく読み取る姿が見られました。

・死亡率の違いから、コレラがいかに深刻な伝染病かを実感することもできました。



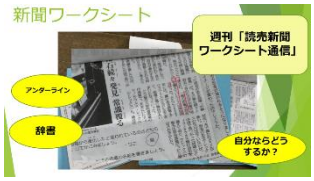
・同様に４年生の研究授業では、「天然痘」の牛種痘を日本に広めた人物として伊東玄朴を取り上げました。

・子供が予防接種である牛種痘を行う絵から、一般に牛種痘を広めるための努力について、反対を受けながらも推し進めていったことを写真、動画、絵など様々な資料を用いて読み進めました。



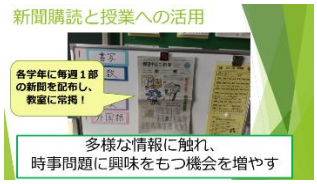
・ここからは、主題に迫るための日常実践を４つ報告します。

・１つめは、「新聞ワークシート」の活用です。
週１回のペースで発行される「読売新聞ワークシート通信」を３年生以上の児童に配り、新聞記事から情報を「取り出す」「自分の考えをもつ」取り組みを行いました。



・アンダーラインを引きながら読む、辞書を引きながら読む、自分だったらどうするかを考えながら読む指導を繰り返し徐々に「考えをもつ」ための発問にも応えられるようになってきました。

・２つめは、新聞購読と授業への活用です。



・朝の会や国語科、社会科の授業で導入などに活用するため、５、６年生には「朝日中高生新聞」１～４年生には「朝日小学生新聞」を教室配布しました。

・多様な情報に触れることで、時事問題への興味を高めるための試みです。

・３つ目は「一人一冊の辞書の活用」です。

・３年生以上は各自の机の横に一冊ずつ国語辞典をかけさせ、適宜使用させました。

・授業中にわからない語句を調べる以外に、各学級の取組で辞書の早引きチャレンジや意味から言葉を当てるクイズ作りなどの活動にも利用しました。

・また、外国語の授業では和英英和辞典を活用しました。

・４つめは、語彙力を増やすための作品作りと校内掲示です。

・光村図書の国語の教科書、巻末付録にある「言葉の宝箱」を活用し、各学年の語彙を増やす作品づくりに取り組みました。

・発達段階に応じた表現方法で作品作りに取り組んだ例として、

・１、２年生は「言葉の木」で文末表現を意識しながら、

・３，４年生は「言葉の窓」で、さまざまな表現に触れながら

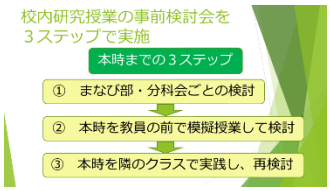
・５年生では「短歌」、

・６年生は自分で表現方法を工夫し、短く自分の気持ちを表しました。

・コロナ禍での研究実践について報告します。

・

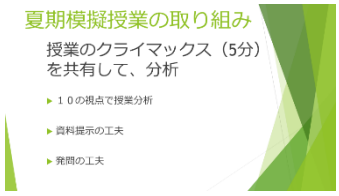
・校内研究授業の事前検討会を、３ステップで行いました。



・「研究 OJT」として、教員の前で模擬授業をし、事前検討会を行うというステップを入れて、リモートでの授業参観の難しさを補うことができました。

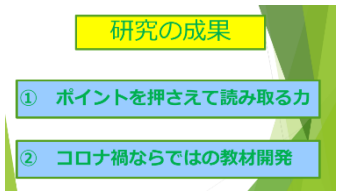
・また、教員の模擬授業研修も、毎年夏休みに行っています。

・１０の視点で授業を検討し、取り入れたいところや感想などを伝え合い、良かった点をお互いに認め合う中で、教師の授業力を向上させていきました。



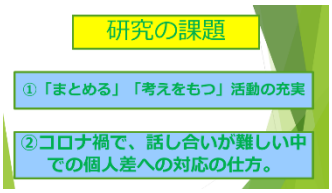
・成果についてお話しします。

・資料に対し、自主的にアンダーラインを引いたり、要点を見出したりすることができる児童の姿が多くみられ、ポイントを押さえた読み取りができるようになってきました。



・コロナ禍だからこその教材開発も、行いました。
・今だからこそ、子どもたちが共感しながら考えられる教材とは何か、考える上で授業力が上がりました。

・課題は
「まとめる」「考える」という活動を充実させていく必要があるということが分かりました。



・また、子どもたち同士の学び合いが難しい状況の中で、個人差への対応が十分にできなかったという課題も残りました。

・予定していた授業実践を大幅に変更せざるを得なかった今年度の研究は、まだ道半ばの感があります。残った課題について、次年度しっかりと取り組んでいきたいと考えています。

以上で報告を終わります。

ご清聴ありがとうございました。